

結晶物語を読んで

電子システム工学科 雛元 洋一

江本勝先生著の『結晶物語 ～水が教えてくれたこと～』という本を先日読みました。なぜ、それを読もうと思ったのかというと水の結晶写真が豊富に載っていて、どの写真も個性的で目を引くものばかりだったからです。また、それらの写真をつなぎ合わせて、ひとつのストーリーとして物語が展開するというのも魅力的でした。内容のはじまりは次の通りです。

水って何でしょうか。生命は、水から生まれました。太古、海という「生命のスープ」から、最初の生きものが生まれたのです。水はすべての生きものの母であるだけでなく、文明の母でもあります。インダス、メソポタミア、エジプト、黄河といった古代文明は、すべて川のほとりで花開いています。

私たち人間の顔がそれぞれ違うように、水の結晶も二つとして同じ姿はありません。しかも、水に声をかけたり、音楽を聴かせたり、あるいは文字を見せたりするうちに、それぞれ味わいのある独特な結晶ができることがわかってきました。宇宙そのものを思わせる荘厳な結晶。繊細できらびやかな結晶。若枝のようなのびやかで愛らしい結晶。生命の輝きともいうべきそれらの美しい結晶を眺め、楽しんでみてください。

水は、文字や言葉、音楽、写真に反応し、それぞれの性質を体現するように、独特の結晶をつくり出します。それは、そのものもつ「波動」を、水が読みとるのだと考えられます。この世界のすべての存在は、波動です。つまり、すべての生きものや物は、すべてが振動していて、固有の周波数を発し、独特の波動をもっているのです。

そして、そのように物がもっている固有の周波数を敏感に感じとるいちばんの名人が、水なのです。水は波動という情報を転写して、記憶することができます。ですから私たちの思いが水をよいものに変えることもできますし、よい波動を持った水を飲むことで、健康を取り戻したりすることが考えられるのです。

結晶というと、宝石のように輝く六角形の姿をイメージする方が多いでしょう。科学的には、結晶とは、原子あるいは分子が規則正しく配列している状態の固体をさします。水が凍るとき、水分子が水素結合によって整然と連なって結晶格子がつくられます。その結晶格子が六角形の構造になって安定し、成長してはじめて、結晶があらわれると考えられます。そしてこのとき、結晶格子のつくられ方によって、まったく異なる姿に成長するのです。氷の粒が成長してから溶けてしまうまで、結晶の一生はわずかです。しかし、その短い生涯は、私たちにかぎりない生命のドラマを見せてくれるのです。

結晶は、いわば「水の顔」です。その水がつくる結晶は、通常の成分分析ではとらえきれない、水の心を写し出してくれます。もちろん、結晶は二つとして同じものはありません。きらびやかな結晶ができるシャーレもあれば、ほとんどくずれてしまっ

ないシャーレもあります。けれど、何種類もの水を五十個のシャーレで凍らせ、その結果を統計にすると、まったく結晶ができない水、くずれた結晶しかできない水、明らかに似た結晶があらわれる水と、それぞれ際立った個性があることがわかりました。私たちが耳を傾ける気になりさえすれば、結晶はさまざまなことを語ってくれるのです。

以上、みなさん興味があればぜひ「結晶物語」を読んでみてください。新たな世界観が広がることでしょう。